

（蝦夷地部分図）』（第22図参照）の「上ノ国エソ」の系譜に連なる者たち）が族的な結合を保ちつつ、渡党の末裔たる蠣崎党の一翼を担っていたとの推量もあながち荒唐無稽ではないと考える。

この館の性格については、「15世紀に和人が蝦夷島進出の拠点」、「蠣崎氏の上ノ国地方支配の拠点」などと言いつたされてきたが、遺構の配置からみても防御性はきわめて強く、要塞のごとき堅固な山城といえる。しかし、主郭内部の様相は鉾山町のごとき都市的である。この館は中世国家の境界領域の真っ直中に成立した、「不定形のエネルギー⁽⁴⁷⁾」を吸引する磁場のごとき「城塞都市」であったと考えられる。

第4節 旧地形の様相

時代によってさまざま様相を呈していた河口部付近の地形環境が、中世という時代における三館の立地に少なからず影響を与え、河口部に三角形で圍繞するかのごとき三館が占地する状況を生み出したものと考えられる。

以下に、三館やその周辺の景観や地形環境について、地図や文献資料の分析、考古学や自然地理学的な調査結果などから読み取ってみることにする。

1 花沢館跡

当町において字名・地番改正が行われた昭和10年当時の地籍図（第23図参照）をみると、館跡東側に同一地名と考えられる「デキ淵」、「テケ淵」、「デケ淵」という旧字名が確認できる。その範囲は天の川の現河道の北東側に向かって大きく突出し、水流の行く手を遮るかのようである。「デケ」とは方言で「でかい（大きい）」の訛音であるので、旧字名「デケ淵」は深くて淀んだ大きな川淵の存在を想起させる。児島恭子氏は、旧字名「花見館」について、「はなみ」をアイヌ語として解すれば、「パナ・モイ pana-moy 浜（川下）側の・淵」と読み解きできるとした⁽⁴⁸⁾。これらのことから、昔時は突出していた城館の先端部を洗うように流れている天の川の上流側に大きく屈曲した淵地形を、その付近には船着き場も想定することができる。

また、地籍図上に上ノ国から太平山麓の小森まで天の川沿いに点状に連なった「岡道」という旧字名も確認できる。この「岡道」は上ノ国から小森へと続く丘陵を東西に縦断する古くからの陸路で、館の先端部を通っていたと推されるが、館の中まで引き入れていたとも考えられる。

これらはすでに市村高男氏が指摘しているところである⁽⁴⁹⁾が、花沢館は通称「岡道」と呼ばれた陸路と、天の川河口部と内陸部を連絡する川路という2つの交通路を扼する要地を占地したとの推測も可能と考えられる。

2 洲崎館跡

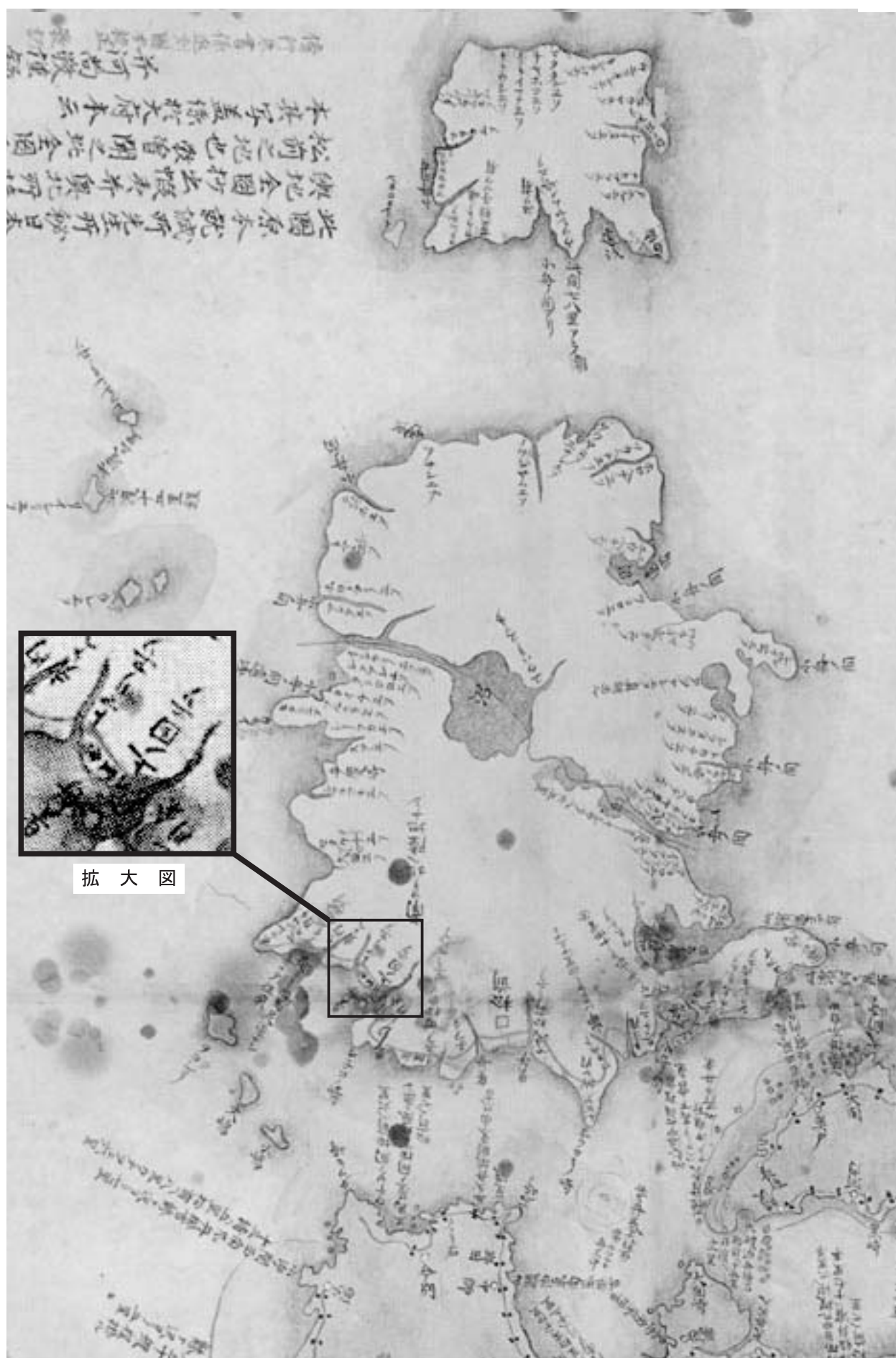
1) 地名としての「天河」－文献調査－

「洲崎」は、『新羅之記録』や『福山秘府』の中で「川北天河の洲崎の館」、「上國河北天河洲崎」などと表記されているので、大地名「天河」に包摂されている小地名であると考えられる。『福山秘府』は、「天河」は「西部上ノ国の地名」と明解に割注を施しているの、語序に則って解釈すれば、川北の「天河」と呼ばれる土地の一角に「洲崎の館」が築造されたことになる。

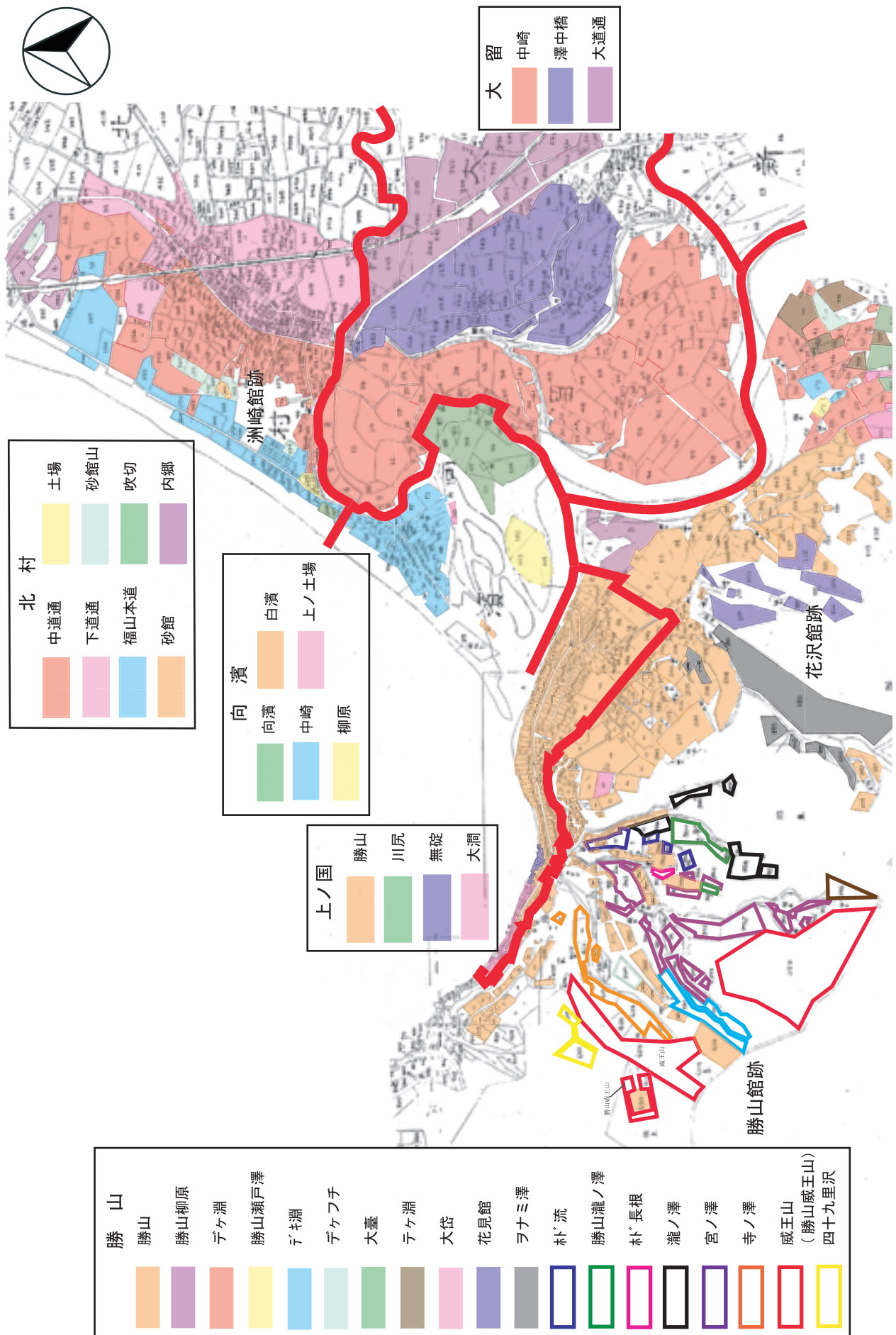
『上ノ国村史』は、「天河」について「少なくとも、てがと読むのが古い呼び方であろう。」としている。元和4年(1618)と同8年(1622)の2度に亘って、イエズス会宣教師アンジェリスが布教のため松前を訪れているが、興味深い報告と地図を残している。その報告によれば、最初に渡道した時、津軽半島西岸の小泊で乗船したが、大時化のために松前に着岸することができず、同船していた松前侯の甥の指示で蝦夷の奥にある湊に着いている。その湊は地図に書き込まれた「tçuga（ツガ）」と考えられており、地図上の位置関係から上ノ国に比定されている⁽⁵⁰⁾。

その湊は、古くは「テガ」もしくは「ツガ」と呼ばれており、その語音に好字二字「天河」が宛てられ、後代には、「天河」は上ノ国と同義と解され、またその字義から川の名として使われるようになったとも推測される。

北海道から東北地方にかけてアイヌ語地名が広く分布していることはよく知られているが、「テガ」や



第22図 正保日本図(蝦夷地部分図) 江戸初期～中期 (高木崇世芝『北海道の古地図』より転載)



第23図 昭和10年当時の字名 (天の川河口周辺)

「ツガ」がアイヌ語系の地名である可能性は十分考えられる。「テガ」や「ツガ」に音韻的にもっとも近いアイヌ語は「to-ka ト・カ」で、山田秀三氏によれば、「沼（の）・上手〔又は「ほとり」「岸」〕の意となる⁽⁵¹⁾。

いまではすっかり陸化してしまったが、天ノ川河口部に水を湛えた潟湖（ラグーン）が存在し、潟湖の上手、いまの砂館神社が建つ北岸一帯が「天河 to-ka ト・カ」と呼ばれていた可能性はきわめて高いと考えられる。

傍証となりうる古文書に年紀が天保10年（1839）亥12月の「御書上 上ノ国」（『全能登屋笹浪家文書』）（巻末「資料編」参照）がある。上ノ国村名主の久末鉄五郎が年寄とともに、在方御掛中に差し出した書付で、上ノ国と北村の境界付近で起こった難破船や寄物などに関する先例を書き上げたものである。

上ノ国の名主たちが表敬のため上様を送迎した場所は「中道通毘沙門堂下」である。毘沙門堂は現在の砂館神社のことであるので、「毘沙門堂下」とは、江戸時代の福山街道（現在の町道向浜線）の路上を指している。

時代が若干ずれるが、寄鯨は「上之国字大川湊脇北之方」と「上之国持毘沙門堂下」に漂着し、破船は「毘沙門下」でも起こっているの、砂館神社前に水域を想定できそうである。また、「川向字大淵折掛下」など湖内の地形を彷彿とさせる地名も記されているので、天保の頃、船幅7～8尺の「中遣船二人乗」が碇泊できるほどの川湊（船溜まりや船着き場）があったと考えてよさそうである。

2）潟湖（ラグーン）の盛衰－自然地理学的調査－

天の川の河口部に洲崎館跡の前面まで水を湛える潟湖（ラグーン）が存在し、中世には川湊が形成されていたとは以前から想定されていたことであるが、館の時代の地形環境や景観を復原するに資料が乏しかったため、自然地理学的な調査を行った（詳細は巻末「資料編」の『上ノ国町洲崎館跡周辺の地形調査』参照）。

その調査によれば、天の川の河口付近は約6000年前の縄文時代前期に地球温暖化によって海水面が上昇し（縄文海進）、それによって海域が内陸に入り込み、大きな内湾が形成された。海面の急上昇が収まってやや停滞すると、砂洲が内湾と日本海を隔てるように延び、北から南に向かう沿岸流の漂砂によって砂丘が砂洲を被覆しながら細長く南西に発達、その内側に潟湖が形成されたものと推定されている。

その後、ラグーンは河川の運搬する土砂が形成したデルタによって埋積が進んで縮小し、また北西の卓越風によって砂丘から飛砂の供給も受けて陸化が進んだが、洲崎館跡の南岸から向浜の砂丘の内側に目名川の流路が残り、その流路沿いに擦文時代や中世の川湊が形成されたと考えられている。

日下雅義氏によれば、日本海沿岸をはじめ各地の砂質海岸に数多くみられたラグーンは、縄文時代の終わり頃から奈良時代にかけて、もっともラグーンらしいラグーンがみうけられ、弥生時代から古墳時代にかけてはラグーンの壮年期、渤海の使節が盛んに来着した8、9世紀頃には若干老化していたという⁽⁵²⁾。10世紀の擦文後期以降、日本海に潮口を開けたラグーンには、流入する河川の埋積作用によって幾つもの中洲が生まれ、クリークが走る景観が広がっていたが、しだいに水域は縮退し、目名川の流路を残して陸化していったのであろう。

当地方のように潮差が30～50センチほどしかないラグーンは避難港としての性格が強いと日下氏は指摘する。好天時の潮差はさほど大きくないが、いったん荒天になると外海からの波浪や暴風などで、辺り一面、鯨が流れ寄るような大きな水域に変貌し、避難碇泊中の中遣船なども破船の憂き目に遭ったのであろう。

3 勝山館跡

1）海辺に臨む絶壁下の上ノ国

勝山館跡周辺の地形環境や景観復原のための環境地理学的な調査は行われていないので館跡直下の上ノ国市街地の地形環境や景観を松浦武四郎の日誌類や発掘調査の成果等を突き合わせながら、以下に素描してみることにする。